

京華中学校 入学試験問題 国語

一、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

四月上旬に行われる春季大会埼玉県北部地区予選、その一回戦だ。けっして強い相手ではない。しかし大代台高校野球部にとっては久しぶりの勝利だった。おれの高校デビュー戦、公式戦初勝利でもある。しかも完封勝ちだ。

「新入生、動員かければええのにな」

ミスターが言った。

新一年生の入部希望者は数名いるが、正式入部は五月の連休明けになる。部活動に関してはスロースタートが伝統だった。県北有数の強さを誇る剣道部でさえ五月入部だ。入学したては学習習慣を確立するために部活動は控えるということらしい。以前には部活九月入部説を唱えた校長がいたらしいが、さすがに圧倒的不評で却下された。五月入部にしても高校の部活動は実質二年半もできない。野球部ならばたったの二十八ヵ月。九月入部にしたとすると、三年生と一年生のふれあいがほぼなくなってしまう。

1 おうえん 応援がしよばくても、部員の顔は輝いている。おれの顔も同じなのだろう。

「青居、よく投げた。バックも打線も満点だ」

ゴキゲンの顔もゆるんでいる。おれのことを名字で呼ぶのはゴキゲンくらいだ。

青居礼文。幼稚園から高校まで、ずっとレブンと呼ばれてきた。中学時代は担任や校長からもレブンと呼ばれていた。こういうとき、あえて気持ちを引き締めるように厳しくふるまう監督は多いが、ゴキゲンはそのへんは素直だった。2

と思っただろうでもなかった。ゴキゲンなりに表情を引き締めているようだ。

ゴキゲンは歯並びが悪く、口を開けるとものすごく抜けた顔に見える。それをゆるんだ表情と見まちがった。口を開けているときと開けたときでは、人格まで別人に見えるから不思議だ。

「今日は早く帰って、メシ食って風呂入って寝ろ」

はい！と返事がそろう。

輪が解けて、二つの集団に分かれる。

三年が四人、二年が九人。おれは大きい集団のほうにいる。野球部員総勢十三名。ここに新入生が入ってくる。久しぶりの勝利を起爆剤にして、大量入部で応援席をにぎやかしてもらいたい。

ゴキゲンは少数精鋭こそが強いチームの必要条件だと胸を張っているが、ベンチ入り二十名にも満たないのだからさびしくていけない。

3 ちよつと前まで、二年生の輪の外におれとミスターがいた。

なんとなく仲間外れ感があった。こっちに引け目があった。仕方のないことで、二人は一年の夏に後れて入部した。当時の三年は引退していた。他の一年生は五月からずっとグラウンド整備や球拾い、用具磨きなどをこなしてきている。

夏の大会が過ぎてからの入部はイレギュラー、掟破りだろう。

それで、おれとミスターだけちよつと雰囲気がちがう。今どきの野球部は坊主頭でなくてもいい。とはいえ長髪がいいわけじゃないから、それぞれにこざっぱりとした短髪をしている。そんななか、おれとミスターは伝統的な潔い坊主頭。五厘の丸刈りだ。

* 二人の途中入部を、同期も先輩も歓迎してくれた。引退した三年生でさえ眉をひそめることはなかった。野球部にはマンパワーが不足しているからだろう。

ふつう、まともな野球部ならば途中入部はできない。入ろうとする部員もいない。埼玉県立大代台高校は学業的にはまずまず、ぎりぎり名門、といったところだろうが、野球に関しては万年一回戦負けの弱小チームだ。しかも監督が赴任してきたばかり。途中入部しやすいタイミングでもあった。

でも、後ろめたさは当然ある。それを払拭する意味でさっぱりと坊主になり、二人でだれよりも早くグラウンドに出て準備をし、最後まで部室に残るようにした。

小さな輪の中から、小柄でがっしりとした男が笑顔で寄ってきた。汗臭さが迫ってくる。

キャッチャーのデカさんだ。

「受けて興奮したよ」

左手をミットのようにパクパクと開閉している。

「高めのまっすぐがうなるんだぜ。あんな球、ふつうは打てないよ」

デカさんが差し出した大きな手を、おれは強く握った。ゴツゴツとした手だ。脂っぽい感触がたのしい。自分以外のだれかのために。

今日の試合。おれはデカさんのために投げた。

正直、だれにするか迷った。ミスターとも他の二年部員とも、この件についての話はしない。なんだか照れくさいからだ。

デカさんに決めたのは、球を受けてくれるキャッチャーだし、三年生だから。

更衣室に戻って顔と手を洗った。右手の指、とくに人差し指と中指が力がついている。

炊事洗濯などやらないのに、手荒れがひどい。おれは保湿クリームをたっぷり塗った。

チームメートのはずんだ声が聞こえる。

おい、とミスターがおれの左肩をたたいた。

「よかったな、レブン」

おれはうなずいた。

「この感激、野球やってないと味わえんな。なんか、世の中にこんなにうれしいことって、そうはないわな」

ほんとうにそうだな、と思う。いつだって楽しいげな様子のミスターが言うと言得力が増す。うれしくてうれしくて、身体からだの細胞一つ一つが喜んでいる。

「これ、大会で優勝したときって、どのくらいうれしいんやろな」

「ものすげえうれしさだろう」

「今以上ってことやろな。それは、想像でけへん。そこまで行ってみないと、分からんことやな」
「よしや！ とミスターが手を打って背中を向けた。景気のいい音だった。」

(須藤靖貴『どまんなか』による)

*注 マンパワー：労働力。仕事などに投入できる人的資源。ここでは「人手」「部員」のこと。

払拭：すっかりぬぐい去ること。すべて取り除くこと。

1. 線部1「応援がしょぼくても、部員の顔は輝いている」について、(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1)『「応援がしょぼい」とはどういうことですか。最も適当なものを選び、符号で答えなさい。』

ア 人数のわりには元気がないので、スタンドからの応援の声が少なく、さびしい感じがするということ。

イ 応援に来ている人たちは、久しぶりの試合で応援の仕方がわからないので、まとまっているということ。

ウ 新入部員がまだいないので、スタンドで応援してくれる者が少なく、貧弱な感じがするということ。

エ 応援に来ている人たちは、久しぶりの勝利なので、どう声をかけたらいいのかわからず、困っているということ。

(2)「部員の顔は輝いている」とはどういうことですか。最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 九回を戦い抜いた部員たちの汗まみれの顔に、四月上旬にもかかわらず真夏のような強い日差しがふりそそぎ、光っているということ。

イ 久しぶりの公式戦勝利を応援席にいる人たちがほめてくれたので、ほめられなれない部員たちはみな照れくさい表情をしているということ。

ウ けつして強い相手ではなかったが、初の公式戦ということで思い通りの動きがなかなかできず、苦しみながらも勝利したこと、みな涙を流して喜んでいてということ。

エ 精一杯取り組んで勝利を得たことによつて、一つのことを成し遂げたというほこらしい思いが、生き生きとした表情となつて表れているということ。

2. 線部2に「と思つたらそうでもなかった」とありますが、「おれ」は「ゴキゲン」がどうしていると思つていたのですか。文章中の言葉を用いて、二十字以内で説明しなさい。

3. 線部3「なんとなく仲間外れ感があった」について、(1)～(4)の問いに答えなさい。

- (1) 「おれ」と「ミスター」のどのような行動が「仲間外れ感」を生じさせたのですか。十三字で抜き出しなさい。
- (2) (1)の行動から生じた「おれ」と「ミスター」の気持ちを表している語を、三字と五字でそれぞれ抜き出しなさい。
- (3) (2)の気持ちは、誰に対するものですか。二字で抜き出しなさい。
- (4) 「仲間外れ感」をなんとか振り払うために「おれ」と「ミスター」がしたことは何ですか。文章中の言葉を用いて、三つ答えなさい。

4. 線部4に「チームメートのはずんだ声が聞こえる」とありますが、「チームメート」が久しぶりの勝利に気持ちがうきうきとしているのと同じように「おれ」も活気づいていることを、「擬人法」を用いて表現している一文をさがし、最初の五字を抜き出しなさい。

5. この文章の表現の特徴について説明したものととして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 「はい！ と返事がさうさう」などのように、かぎかっこを用いずに会話の内容を示すことで、文章全体に現実感が生み出されている。

イ 主人公の「おれ」の視点に寄り添いながらも、他の登場人物の視点を交えることで、それぞれの人物の心情が分かりやすく描かれている。

ウ 「ゴキゲンの顔もゆるんでいる」などのように、しぐさや表情に関する表現を効果的に用いることで、登場人物たちをいきいきと描き出している。

エ 主人公の内部から仲間たちに受け入れられるまでの回想場面を入れることで、チームの結束力の強さが読者に伝わりやすくなっている。

6. 線部「ちよつと前まで、二年生の輪の外におれとミスターがいた。」(25行目)以降、回想(以前のことを思い起こしている)部分が始まりますが、回想部分の終わりは何行目までですか。行数を答えなさい。

二、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

私たち日本人の多くは、もともと農耕を中心とした生活の中で、四季折々の自然をいとおしみ、抗しがたい大自然や「見えない大きな力」神仏への深い畏敬の念を持って暮らしていました。たとえば何か悪いことをすると、

「そんなことをしたらお天道様の下を歩けないぞ」と諭す、「天」に対するフェアプレイの精神がありました。

a 何か行動するとき、見えない力、神仏の目に照らしてみるとという判断の「タテ軸」を持っていました。

一方、そんな「タテ軸」の意識とともに、日々の生活の場面に目を向けると、たとえばちよつとした成功でも、

「これは皆様のおかげです」

と、周りの人間関係に感謝の気持ちを馳せる素晴らしい習慣がありました。これが集団主義文化の日本社会で育まれてきた判断の「ヨコ軸」です。

相手の顔を潰さないように「面子」を重んじたり、常に相手を気づかって感謝する「対人配慮」がヨコ軸の価値観であり、それが日々の生活態度に出ていました。

2 見えない力に照らすというタテ軸と、対人配慮というヨコ軸を持っている。これがもともと日本人が持っていた思いやりを支えていた強力な二つの軸だったのです。

b いまはなんとという変化でしょうか。何も天然資源がなくとも、世界に誇るべき私たちの基本財産だった「思いやり」はどこへ消え失せたのでしょうか。

満員電車でデーンと大股を開いてシルバーシートに陣取っている若者を見て、前に立っている本物のシルバー世代は儼然とつぶやきます。

「何て思いやりのない若者だ！ 少しは年寄りの気持ちを理解して思いやりを持ったらどうだ」と。

相次ぐ小中学校のいじめ問題に対する当事者の教師たちの知らんぷりを見ると、父母は怒り交じりに発言します。

「いまの教師には、生徒への思いやりというものが欠如しているのではないか」
*けつじょ

本当にその通りです。当の教師にはいじめたりいじめられたりする生徒たちの苦しい胸の内を「思いやる」という気持ち
があまりにも不足しているに違いありません。

町に出れば狭い道路に雑然とはみ出して置かれた自転車^{せま}の列が、通行人の歩行を危険にしています。そこで私たちは周囲
を見回して、

「なんと思いやりのない！ こんな置き方をしたのは誰だ！」
だれ

会社では帰宅を急ぐ若手社員に、帰り際に限って難しい仕事を命じる上司に、部下は腹立ち紛れに、
「まったく。上司のくせにちよつとは下の者に思いやりを持ったらどうなんだ」
はらだ まき

と、これは口に出せずに腹の中の叫び。

これらの思いやり欠如への非難の特徴を、私の専門のパフォーマンス学・心理学の視点から詳しく見ると、とても不思議
なことが三点判明します。

まず第一に、みんながみんな「思いやりの足りないのは相手のほうだ」と思っていること。「思いやり」は相手から来る
ものであつてそれをもらっていない自分は被害者である、という感覚です。

第二に、この気持ちはじつは「怒り」の感情を生み出す情動と密接な関係があることです。第三章で詳しく述べますが、
「怒り」は欲求妨害から生じます。思いやりを求める「思いやり希求」もまさしく人とかかわって生きたいという親密欲
求の一部だと言えるからです。

現代人がなんだか怒りっぽく、人間同士表面的な会話はできても、なかなか踏み込んだ会話ができないのは、心の中にこ
んな怒りがいつもあり、どこかに他人に対する「心の鎧」を作ってしまうからでしょう。それが、内向き志向で他者に打
ち解けにくいという現代人の傾向を作っています。

他者の思いやり欠如に腹を立てたのが引き金になって、極端な場合は殺人にいたる攻撃行動に結びつく例を私たちはた
くさん見えています。

第三の特徴は、多くの人は自分は「思いやり」のあるほうだと漠然と思っているということです。
ばくせん

たとえば「あなたは他人に思いやりがあるほうですか」という問いに対して、私の大学院と学部³のゼミでは全員が「まあ
まあある」も含めて「ある」と答えています。

「自分にはある。人からは来ない」。これが思いやりに関する実感です。そんなバカな？ 「みんながあるなら、みんなか
ら来る」はずです。
c 変なのです。

では、思いやりとは何だと考えているのでしょうか？

その質問に対しては、ほとんどの人が「他人のことに思いを馳せ、自分の身に比べて他人の身を思うこと」といった答え
を返します。これは間違いではありません。そしてその答えはみんながその程度のことならちゃんとできている、と思う内容で
もあります。

しかし残念ながらそれでは不十分です。真の思いやりの意味、それが拠って立つ価値観と人間関係スキルの表現法という
三つの視点において、残念ながら現代人は「思いやり」をまったく誤解しています。
4

d それは先述したように、以前の日本人はしっかりわかって大切にしていたものですが、いまではすっかり忘れ
去られていることなのです。

*注 抗しがたい：さからうことが難しい。さからうことができない。

畏敬：偉大なものとして、おそれ、うやまうこと。

馳せる：気持ちなどを遠くまで至らせる。

面子：世間から受ける評価。

惘然：がっかりしたり、驚きあきれたりして、気が抜けたようになるさま。

欠如：あるべきものが欠けていること。

情動：心の動き。

ゼミ：大学などにおける、少人数でテーマに関する報告や議論を行う形式の授業。
拠って立つ：よりどころとする。

スキル：技能や技術。

(佐藤綾子『思いやりの日本人』による)

1.

a
d

 に当てはまる言葉として最も適当なものを選び、それぞれ符号で答えなさい。
ア しかも イ つまり ウ だから エ ところが

2. 線部1に「顔を潰さない」とありますが、「顔を潰す」の文章中の意味として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。
ア 名誉を傷つける。 イ 面目を保持させる。 ウ いらないものとする。 エ がっかりさせる。

3. 線部2「見えない力に照らすタテ軸と、対人配慮というヨコ軸」について、(1)・(2)の問いに答えなさい。
(1)「見えない力に照らすタテ軸」の説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 自分の行動の善悪を判断するときに、世の中での自分の役割は何であるかをよく考えて、その場その時にふさわしい答えを出すために、いつでも真剣であるということ。

イ 自分の行動の善悪を判断するときに、すぐに決められない場合は、周りの人に相談することも大事だが、ときには神仏の教えに照らし合わせる必要があるということ。

ウ 自分の行動の善悪を判断するときに、誰のためと特定するのではなく神仏などのような対象を一時的に仮定して、それにとって何が一番いいことなのかを考えるということ。

エ 自分の行動の善悪を判断するときに、人間の力が及ばない大いなる自然や、日ごろ自分自身が信じている神仏の存在を意識して判断しようとするということ。

(2)「対人配慮というヨコ軸」の説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 何か行動するときに、その行動は必ず誰かに見られているものと留意しておくということ。

イ 何か行動するときに、自分のことよりも、相手や周りの人に対して常に気を配るということ。

ウ 何か行動するときに、その行動は誰のために役立っているのかと常に問いかけるとのこと。

エ 何か行動するときに、自分が普段周りからどのように見られているかを意識しておくということ。

4. 線部3「内向き志向で他者に打ち解けにくいという現代人の傾向」が生み出される理由について説明した次の文の①・②に当てはまる言葉を、それぞれ指定字数で抜き出しなさい。

現代人の心の中には①(八字)気持ちがありながら、その欲求が満たされないという怒りがいつもあり、他人に対して②(三字)を作ってしまうから。

5. 線部4に「現代人は『思いやり』をまったく誤解しています」とありますが、「現代人」は「思いやり」とはどのようなものだと考えていますか。三十字以内でさがし、最初と最後の五字をそれぞれ抜き出しなさい。

- 三、次の①～⑤の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで書きなさい。

- ① 激しい口調で責めたてる。 ② 辺りに警笛が鳴り響いた。 ③ この店がみそカツの元祖だ。
④ 委員会の支柱となって働く。 ⑤ 山頂で日の出を拝む。

- 四、次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字で書きなさい。

- ① 君のしつこさにはコウサンだ。 ② 祖母の墓前に花をソナえる。
③ 窓が割れて、ハヘンが辺りに飛び散った。 ④ 有名な画家の作品をモシヤする。
⑤ ロボットをソウジュウする。

京華中學校 入学試験 国語解答用紙

[illegible]